



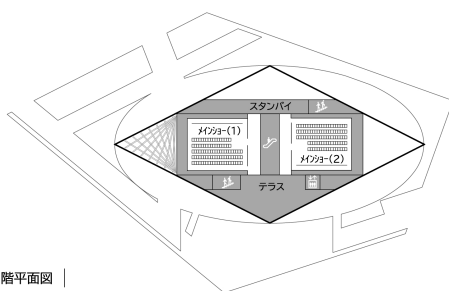
写真1 北西外観

が内接する、三つの幾何学形状が重なるデザインで構成される。これらをそれぞれ「生命」「地球」「人間」に見立て、相互に支えあう関係性を表現した建築である。

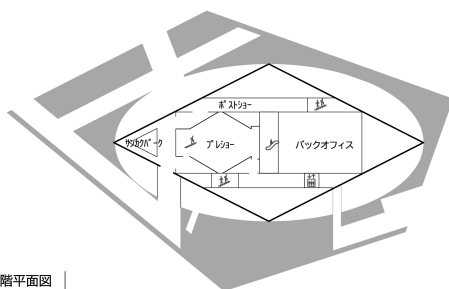
来館者はまず、半地下空間の〈ウェイティングパーク〉に降り立つ。ここは建物が日射を遮り、冷気が流れる快適な待機スペースとなり、猛暑時の日よけ空間としてすべての来場者に開放される。そこから1階の〈プレショー〉でガイダンス映像を視聴し、2階の〈メインショー〉へ進む。大型映像体験を終えた後、再び1階へ下り、〈ポストショー〉を通過して、最後に先端の浮遊する〈サンカクパーク〉へとたどり着く。この順路は単なる移動経路ではなく、建築空間そのものが展示体験と結びつき、来館者の身体を通じて語りかける。地下から始まる体験は、やがて上昇し、開放され、そして再び地表に回帰していくという構成になっ



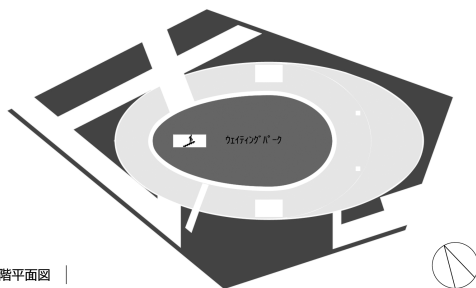
写真2 〈サンカクパーク〉見上げ



2階平面図 |



1階平面図 |



B1階平面図 |

図2 平面図

ており、その動線の変化とともに空間の質や視界、音、光の状況も徐々に変化していく。建築がシークエンシャルに演出を導くことで、展示映像の内容と空間体験が重なり合い、順路そのものがストーリーになっている。これは、建築と展示を別々のレイヤーとして考えるのではなく、両者を統合することで体験の一貫性と没入感を高める空間統合的な試みである。

3 解体を前提とした構法と素材

さて、万博パビリオンは半年間の会期の後に解体し、敷地を元の状態に戻すことが決まっている。そのため、私たちは建設から解体までの過程をトータルにデザインする、小さな資源循環を可能と

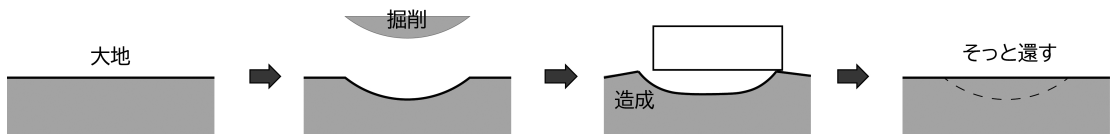


図3 大地を間借りする思想を示したダイアグラム

する建築を目指した。

三菱未来館の設計では、まず建物と地面の接地面を最小限に抑えている。これは「大地を間借りする」という思想に基づき、会期終了後にそっと還すことができるようにするためである。基礎構造においてはベタ基礎ではなく杭基礎を採用し、掘削した土を敷地造成に再利用している。これにより、コンクリート使用量とCO₂排出量を縮減し、建物と地面の接触面を最小限に抑える設計を実現した。また、使用した杭は回転貫入鋼管杭と呼ばれるもので、将来的に再利用可能な構法となっている。地盤への恒久的な影響を最小限にしつつ、撤去の容易性を高めることができた。さらに、掘削された土は敷地内で造成や埋め戻しに再利用される計画とし、土砂の外部搬出や廃棄を極力減らすこととした。

内外装の仕上げ材としては、本来工事中に使用される仮設資材を転用し、可能な限りリユースできるように設計されている。通常は建設工事のみに使用される鋼製足場板、単管パイプ、ライトゲージスタッドなどを、仕上げ材・意匠材として本設の構成要素に取り込んでいる。具体的には、外装に鈍く輝く鋼製足場板を用い、水抜き穴から屋内へと光が差し込む幻想的な効果を生み出した。単管パイプは手すりや壁面装飾に、ライトゲージスタッドは天井ルーバーとして活用された。これらの資材は、断面の形状や光の反射の仕方、構成単位としてのリズムなどに着目し、意匠としての素材の表情が空間全体の印象を形づくるよう設計されている。また、施工の簡易性と解体後の再利用のしやすさも意識されており、部品の固定方法や取外しの構法にも仮設的な合理性が組み込まれて

いる。

こうした素材は、一般に「使い捨て」あるいは「裏方」の存在と見なされてきたが、三菱未来館ではそれらを本設のデザイン要素としてあえて見せることで、空間の表情として際立たせている。無骨さや素材感を隠すのではなく、そのまま魅せる設計とすることで、これまで可視化されなかった仮設資材の新しい可能性が提示されている。

建物の空調も必要最小限に抑え、内部の大部分は「縁側」のような半屋外空間として構成されており、空調負荷の低減を図っている。また照明計画においても華美な演出を避け、建物の内側からにじむような柔らかな光によって、会場に向かって明暗のグラデーションを生み出す。

4 持続可能なライフサイクル

従来、建築のライフサイクルをできるだけ長く保ち、価値を持続させることがサステナブルとされてきた。とりわけ、既存の建物を解体することなく、用途や空間構成、性能を更新する「リノベーション」は、時間の蓄積を継承しつつ新たな価値を創出する手法として高く評価されている。これは、物理的なストックを活かすと同時に、建築に対する文化的・社会的愛着を保ちながら、環境負荷を低減する持続可能なアプローチである。他方、三菱未来館のように、あらかじめ解体と再資源化を想定して「短くつくり、そっと消える」ことを目指す仮設建築もまた、別のかたちのサステナビリティである。これらは一見対照的なアプローチのように見えるが、どちらも「既存のものに新しい意味や価値を与える」という思想において共通しており、建築の持続可能性に対する多様な

選択肢の一つとして位置づけることができる。

特に仮設建築においては、その終わり方(解体・再資源化・転用)の美しさ、無理のなさ、環境負荷の低さが問われる。この点において三菱未来館は、建設・使用・解体の各フェーズを統合的に設計し、それぞれの過程で循環性を意識した素材・構法・運用を取り入れている。つまり、そのライフサイクル自体を一つの建築と捉え、環境配慮と社会的意義を両立する試みなのだ。

本建築における一連の取組みを、わたしたちは「ショートサーキュラー・アーキテクチャー」と総称した。この概念は、短期間で解体される運命にある建築を、いかに環境・資源・経済の観点から持続可能に設計するかという挑戦である。サーキュラーであることが素材や構法の問題にとどまらず、時間軸と空間体験、さらに社会的価値の循環までを内包する広義の設計思想として展開される。三菱未来館は、物理的には一時的な建築でありながら、設計から解体後までを見据えたプロセス全体を建築の一部として組み込むことで、仮設建築の可能性を根本から更新したといえる。

三菱未来館が示しているのは、建築の価値が「長く残ること」だけにあるのではなく、いかに社会や環境と応答しながら時間を過ごすかという問いへと、建築の本質が移行しつつあるということである。その意味で、仮設建築はもはや一時のぎのモノではなく、新たな都市や社会の変化に対し

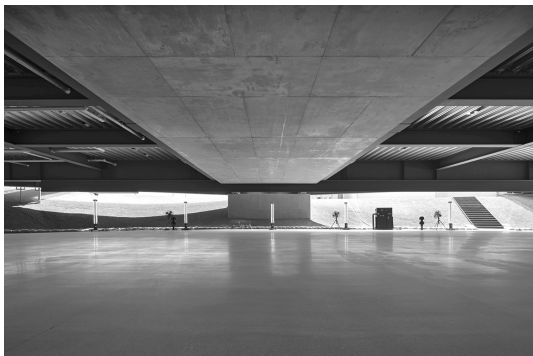


写真3 半地下空間の〈ウェイティングパーク〉

て柔軟かつ戦略的に応答するインフラとして再定義される。

5 おわりに

三菱未来館は、空間体験と展示の統合／土壌の循環利用／解体を考慮した構法／仮設資材の転用といった多層的なアプローチによって、仮設建築＝持続可能な建築という一見逆説的な構図を成立させた。そして、これは単なる万博パビリオンにとどまらず、今後のまちづくりや公共建築において「建てること・還すこと・使い回すこと」の全体像を問い直すための、資源循環モデルとしての建築である。

こうしたショートサーキュラー・アーキテクチャーの視点は、「建てること・還すこと・使い回すこと」という建築行為を、物理的プロセスではなく、社会や環境との関係性を再編成するフレームとして捉え直すものである。ここで重要なのは、それぞれの行為が独立した操作ではなく、循環的かつ連動的に価値を再構築する機能を果たしている点にある。「建てること」はもはや完成を目指す行為ではなく、変化し得る状態として構築することであり、「還すこと」は、解体＝喪失ではなく、借りた資源を自然に戻し、環境に配慮した着地を実現することである。そして「使い回すこと」は、素材や空間を新たな文脈に置き換えることで、意味と機能を再編集する実践と捉えられる。

このようにして建築は、固定されたモノから、状況に応じて編成され、環境や社会と動的に呼応する“関係体”へと、その性質を変えつつある。ショートサーキュラー・アーキテクチャーの思想は、「建てる→使い切って→壊す」という従来の線形的なライフサイクルに対して、循環的かつ柔軟な価値創出モデルを提示するものであり、今後の建築における新しい文法になる可能性を示すものと考えられる。

(撮影：ナカサアンドパートナーズ／中道 淳)